



和文教科書

宇治拾遺物語ぬきほ

七卷

中央書局

成
 五
 十
 七
 書

共
 八

ホ 2
218
7



源歌子編輯

和文教科書

東京書肆 中央堂發兌

東京書肆
學校圖書

和文教科書七之卷

美濃 源歌子 編輯

宇治拾遺物語ぬき

龍門の聖鹿を替へんと欲する事

大和國よ龍門といふ所よ聖ありけり。信みける
所を名うて龍門の聖とぞいひける。其聖の親
く志りやりける男の明け暮れあを殺しける
照射といふことを志ける頃のみどろ晴るか
りけり。夜照射よゆでよけり。鹿を求めありけり。

利
門
218
卷
7

親一けりよの
よてあやま
なはんきこ
てがとたかく
は男のとあ
の文はこいの

源歌子編輯

和文教科書

東京書籍 中央堂發行

東京書籍 學校圖書

利門 218 卷 7

殺しけるよの
も、あやまり
な、ん、う、こ、
も、が、と、な、う、て
て、男、の、と、あ、る、
の、文、字、と、い、の

和文教科書七之卷

美濃 源歌子 編輯

宇治拾遺物語ぬきほ

龍門の聖鹿よ替とんと欲する事

大和國よ、龍門といふ所よ、聖ありけり。信みける
所を名よて、龍門の聖とぞいひける。其聖の親
く志りしりける、男の、明け暮れ、志を殺しける
よ、照射といふことを、志ける頃、いみじう暗くか
りける夜、照射よ出でよけり。鹿を求めありしほ

とす。

まゝ一ようて
此よりて下
の如く、よせて
となくても、自
他の語脈、と
のまゝす。

どよ、目をあそせうりけれど、志ありけりとして、
おまゝ一くするよ、たかよ、目を合せうり。矢
頃、まゝ一よりて、火串よ引きあけて、矢をまげ
て、射んとて、弓ふりうて見ると、此鹿の目のあそ
ひの、例の鹿の目のあそひよりも、近くて、目の色
も、替りうりけれど、あや一と思ひて、弓を引きさ
して、よく見けるよ、おほ怪一かりけれど、矢をま
づして、火をとりにて見ると、鹿の目よ、あそぬな
りけりと見て、起きを起きよと、思ひて、近くまを
一よせて、見れど、身を、一ちやうの革よてあり。な

ほ、鹿なりとして、まゝ射んとするよ、おほ、目のあそ
ざりけれど、たかよ、ちよちよせて、見ると、法師
の頭よ、見な一つ。こも、いうたと見て、おり走りて、
火うちふきて、志をりとしてみれど、此聖の、目う
ちたきて、志の皮を、ひきわづきて、そひ即一
給へり。こもいうに、わくても、存一ますぞといへ
む、ほろく一と泣きて、おぬ一が、制する事を聞か
ず。いゝ、この鹿を殺す。これ、鹿よ替りて、殺され
なむ、さりととも、す一と、止まりなんと、思へど、か
くて、射れんとして、居らなり。口惜一う、射ざり

つと、宣ふよ、この男、やゝまろび泣きて、かくまで、
おぼしける事を、あながちよ、志侍りける事とて、
そこよて、刀を抜き、そうち切り、やなぐひみな
折り碎きて、髻切りて、やがて、聖よ俱して、法師よ
なりて、聖の、在しけるが、おぎり、聖よつうもれて、
聖うせ、給ひけれ、かゝりて、又、そこよぞ、行なひ
て、居りけるとなん。

易のトひして、金取りおぼす事、

旅人の、宿求めけるよ、大きやうなる家の、あざれ
ころが、有りけるよ、よりて、ころよ、宿し給ひてん

よきこと、此下
よま、なうとい
あべきを省け

あら、あやさん
なめり。此も當
時の俗語よて、
あり不思議な
ごりふ意なく
の語なりべし。

やと、つくと、女聲よて、よきこと、宿り給くと、つくと、
みな、おり居よけり。屋おほきなれども、人の有りげ
もなし。ころ、女一人ぞ、有るけしひしけり。かくて、夜
明けよけれ、物を、物らひあつめて、おぼし行くを、此
家よ在る女、おで来て、えおで在せど、止まり給く
と、つと、ころ、つくと、問へ、おのれが、金、千両おひ
給り。其、辨くし、ころ、おで給も、めとつくと、此旅
人、ずんごども、笑ひて、あら、あやさんなめりと、つと
と、此旅人、志むしといひて、まさ、おり居て、皮匣を、
請ひよせて、幕引きめぐらして、志むしを、めりあ

そのも人を指して云ふなり。そのこといふが如し。

さうなるの下は、べーといふ語なくとも用ゐえず。落ちさうなくんら。

りて、此女を呼びけれむ、ゆで来よけり。旅人、問ふやうも、此親も、むし、易の占ひといふ事やせられしと問へむ、いさ、さや侍りけん。其志給ふ、やうなる事も、志給ひきと、いんを、さうなるといひて、さても、何事よと、千両金おひらう、其辨くせよとも、いふぞと問へむ、おのれが親の、うせ侍りしをうよ、世の中、又在るべき程の、物をど、えさせおきて、申しやう、今十年有りて、その月よ、こゝよ、旅人来て、宿らんとす。其人も、我が金を、千両おひらう人なり。それよ、其金を請ひて、堪くが、かかかんをり

くもハ、こもといふは同じ。

も、賣りて、過ぎよと、申しかむ、今までも、親の、得させて、侍りし物を、すくも、賣りつかひて、今年となりて、も、賣らるべき物も、侍らぬまよ、いつか、我が親の、いひし月日の、とく来か、と、侍ら侍りつらよ、今日よあつりて、在して、宿り給へれむ、金をおひ給へら、人なりと、思ひて、申すなりといへむ、金の事を、まことなり。さう事あらうんとて、女を、かすみよ、引きて、行き、て、人よ、知らせで、柱を、たかすれむ、うつぼなる聲の、する所を、くも、これが、中よ、宣ふ金を、有らぞ、あけて、すくも、つら

取りおぼし、つうひ給くと、教へて、おぼし、いたけり。
此女の親の、易の占ひの上手よ、此女の、ありさま
を考へけらよ、いま、十年ありて、貧しくならん
とす。その月日、易の占ひする男、来て、宿らんず
と考へて、かゝる金ありと告げて、まづ、きよ、取
りおぼし、遣ひ失なひて、貧しくならん程よ、つ
かぬ物なく、まづ、ひなんと、思ひて、志づ、いひ教へ
て、死にけら後よ、この家をも、賣り失なを、まづ、
今日を待ら、つけて、此人を、かくせめ、けれ、これ
も、易の占ひする者よ、心をえて、占ひおぼし、

宿らんずとす
の、約まりなり
されむ、よか
けて、いふ、ま
宿らんずとす
を省きて、云
で、かゝる、ま

教へ、いひ、いたけらなりけり。易の占ひを、行末を、
掌のやりよ、まづ、知事よ、有りけらなり。

秦兼久、通俊卿、又向ひて、悪口の事、

今もむ、治部卿、通俊卿、後拾遺を撰む、れけら
時、秦兼久、行き向ひて、おのづから、歌を、や入る
と思ひて、うか、ひけらよ、治部卿、おぼし、物
か、う、い、て、わか、なる、歌、よ、み、こ、と、い、も、れ、け
れ、む、ま、か、ぐ、い、き、歌、候、ま、ず。後三條院、崩れ、させ
給ひて、後、圓宗寺、又参りて、候ひ、い、ま、花の、白ひ、も、
昔、よ、も、替、ら、ず、侍、り、い、う、む、つ、か、う、ま、つ、り、て、候、ひ

もう、く、し、も、慥
り、な、ら、を、い、ふ
され、む、こ、も、
よ、き、歌、の、な、ま、
を、い、ふ。

しちうとして、

去年見し、も、色もかろく、大咲きよけり、花
こそ物も、思もざりけれ、とこそ、仕うまつりて、候
ひし、かど、いひけれを、通俊卿、よろしくよみたり。
但し、けれ、けり、けり、など、いふ事も、いと、もなき、
詞なり。それをも、さる事よて、花こそといふ、文字こ
そ、女の童などの、名よ志つべけれとして、いとも、賛
められざりけれむ、うらむ、少なよて、立ちて、侍士
どもありける、所よよりて、此殿も、大方、歌のあり
さま、知り、給へぬこそ、かろく、人の、撰集承り

申しけるもの
下も、如何ぞ
などいふ詞の
あるべきを、略
せり。斯ら
詞づくは、今
の口語も、い
ふことなり。

て在するも、あさましき事かな。四條大納言の歌よ
春来てぞ、人もとひける、山里も、花こそ宿の
あらどなりけれとよみ、給へるも、めでしき歌と
て、世の人口よのりて、申しけるも、其歌よ、人もと
ひけるとあり。まゝ、宿のあらどなりけれと、あめ
るも、花こそと、いひるも、それよも、同どさまな
るよ、いふなれむ、四條大納言の、愛でし、兼久
かも、むろからべきぞ、かろく、人の、撰集承りて、
撰ひ、給ふ、あさましき事なりと、いひて、おでよけ
り。さぶらひ、通俊の、もくへ、行きて、兼久こそ、かろ

和文教和書 七之卷

く申しと、出てぬれと、語りければ、治部卿、うらう
なづきて、さりけりく、物ないひそとぞ、いそれけり。

児の、かい餅するよ、空寐志ころ事、

これも、今もむろし、比叡の山よ、ちど有りけり。僧
たち、夜居のつれぐよ、いざ、かひもちひせんと、い
ひけりを、このちど、心よせよ聞きけり。さりとして、
志出ざらんを待ちて、寝ざらんも、つらうりなん
と思ひて、かこくよよりて、寐ころ由よて、出でく
ろを待ちけるよ、すでよ、志出ざらんころ、さまよて、
ひーめきあひころ。此児、さざめて、驚らさんすら

待ちけるかと
もぞ思ふも若
しや待ちける
かと思ふの意
なかり。

むごの後を語
の絶えころ後
をいふ。

んと待ち居ころよ、僧の、物申しさざらん、驚ら
せ給くと、いふを、嬉しとも思ふども、たが一度よ
いしくんも、待ちけるかともぞ、思ふとて、いま一
聲呼ぶれて、いしくんと、念下て寐ころほどよ、や
な起ら奉りそ、幼なき人も、寐入り給ひよけり
といふ聲の志けれど、あな、つびーと思ひて、いま
一度、あらせかーと思ひ寐よ聞けど、ひーくと、
たが食ひよ、食ふ音の、志けれど、すべなきて、むご
の後よ、えいと、いしくりければ、僧達、笑ふこと
かざりたり。

田舎の児櫻の散るを見て泣く事

これも今をむろし、田舎のちごの、比叡の山へ登り、りけるが、櫻の、めでしく咲き、りけるよ、風の、烈しく、吹きけるを見て、このちご、さめぐと泣きけるを見て、僧の、やろよりて、なごかうを、泣かせ給ふぞ、此花の散るを、惜しうおぼえさせ給ふか。櫻も、そのなき物まで、かく程なく、移る候ふなり。されども、さのみぞ候ふと、慰めけれど、櫻の散るんも、あながちよ、いりせん、苦しからず。我が、この作り、さ、麦の花、散りて、實の、入らざ

さのみぞ候ふも、さむりよても無の意よ、云ふべき所なれ、落字もやあらざらん

うそやな
の下も語多
く落ちるな
らん

らんを、思ふが、びきと、いひて、さうりあげて、よくと泣きけれど、うそやな。

大童子、鯉盗みする事

これも、今をむろし、越後國より、鯉を馬よおぼせて、廿駄ばかり、粟田口より、京へおひ入れけり。それ、粟田口の、鍛冶が居る程よ、いづきさげらる、大童子の、まみ志がれて、物むつり、童るか、みも、見えぬが、此鯉の、馬の中よ、走り入り、けり。道を、狭くて、馬なると、ひめきけるあひ、この大童子、走り、鯉を、こり、引きぬきて、ふ

てんげりもて
けりの音便な
り。

かうちやうた
綱長よて支配
人をいふせん
にせんやう

とこらへ、引き入れんげり。さて、さうげなくて、
走りさまさぶちけるを、此鞋も、俱くも男、見てけ
り。走りさまさ立ちて、童の、たこらびをとりにて、引き
止めて、いふやう、にせんやうも、いうで、此鞋を
盗むぞと、いひければ、大童子、さう事なす。何を
證據よて、かうを宣ふぞ。にぬが取りて、此童よ、
おほするなりといふ。かく、ひめく程よ、より下
るもの、市をなして、行きもやうで、見合ひうり。さ
うほどよ、此鞋の、かうちやう、まさしく、にせん
やう取りて、ふとこらへ、引き入れつといふ。大童

て、我が先生よ
て、汝といふよ
同。

子も、まさしく、にぬが、盗みつれといふ時よ、此鞋
よつとこらへ、男、にせんが、所我も人も、やとこらへを
見んといふ。大童子、さまでやも、あるべきなど、い
ふほどよ、この男、袴をぬぎて、ふとこらへをひらげ
て、くも見給くと、いひて、ひくくとす。さて、此男、大
童子よつとみつきて、にせんちやう、さう物脱ぎ
給くと、いふ。にせん、さまであーとよ、さまで有ら
べき、事かといふを、此男、たぐ脱ぐせよ脱ぐせて、
まくを、引きあけうらよ、腰よ、鞋をこら、服よ添へ
てさうらう。男、くもくといひて、おぼくうりける

こかわやうよま
此れ斯やうよ
なり。

けらとかも、け
りとかと、あら
べきなり。

時よ、此大童子、うち見て、あそれ、勿体なきまかな。
こ、かわやうよ、もぐかよちて、あさうんよも、如何
なる女御、后なりとも、腰よ、さけの、一二尺なきや
うも、有りなんやと、いひさうりけれど、そらら、まら
止りて、見ける者ども、一度よ、もつと笑ひけるとか。

尼、地藏、見奉らる事、

今も、むら、丹後國よ、老尼有りけり。地藏并を、曉
毎よ、ありき給ふことを、仄らよ聞きて、曉毎よ、地
藏見奉らんとて、ひと夜、かいまどひありくよ、博
おちの、うちほうけて、居らるが、見て、尼公も、寒き

よ、何らぞ、志給ふぞといくを、地藏并の、曉よあり
き給ふならよ、逢ひ参らせんとて、ありくなりとい
いぬを、地藏の、ありかせ給ふ道を、我こそ知りこ
れを、いざ給へ。あもせらるせんと、いぬを、あそれ、
嬉しきことかな。地藏の、ありかせ給ふ所へ、我
を、あて、在せよといくを、我よ、物を得させ給へ。や
かて、あて奉らんと、いひけれど、此着らるきぬ奉
らんと、いぬを、いざ給へとて、隣なる所へ、あて行
く。尼悦びて、急ぎ行くよ、その子よ、地藏といふ
童、有りけるを、それが、親を知りさうりけるよより

地藏その下よ
居らうなごの
語のあらづき
を畧せらる。

利仁著 七世巻
て、地藏もと、伺ひけれむ、親遊ひよいぬ。今、来なん
といくを、くも、くとなり。地藏の、存します所をと
いへむ、尼嬉しくて、紬のきぬをぬぎて、取らすれ
む、博おちも、急ぎて、とりていぬ。尼も、地藏見参ら
せんとして、居られむ、親どもも、心得ず。など、此童を、
見んと思ふくんと、思ふほどよ、十ぞかりなる童
の、来らるを、くも、地藏よといへむ、尼見らまらよ、
是非も志らざる、臥しまらびて、をがみ入りて、土よ
うつづりらる。童、すまえをもちて、遊びけるまら
よ、来らりけるが、そのすまえして、まらびのや

極樂へ参りま
けりて死たさ
るをいふ。此ご
ろのものを、
かうやうの筆
づかひ多し。

うよ、額をわけむ、額より、顔のうへまで、さけぬ。さ
けらる中より、えもいそぎ、めどき、地藏の、御顔
見え給ふ。尼をがみ入りて、おち見あげられむ、か
くて、立ち給へれむ、涙を流して、をがみ入り、糸ら
せて、やがて、極樂へ参りよけり。されむ、心よぶた
も、深く念どつれむ、佛も、見え給ふなりけりと、信
ずべし。

利仁、著 預粥の事、

今も、むら、利仁將軍の、若かりける時、その時の、
一の人の、御許に、格勤して候らひけるよ、正月よ、

大饗せられけりよ、そのかみも、大饗とて、とり
かみといふ物を、拂ひて入れずして、大饗のあら
し米とて、給仕し、格勤の者ども、食ひけり
なり。其所よ、年頃よなりて、給仕し、者の中よ
と、所え、五位有りけり。其おろし米の坐よて、
芋粥すりて、舌うちをして、あをれ、いりて、芋粥
よ飽うんと、いひけれむ、利仁、これを聞きて、大夫
殿、いまだ、芋粥よ、飽うせ給はずやと問ふ。五位、い
まど、飽き侍らずと、いへむ、飽うせ奉りてんか
と、いへむ、かゝく侍うんとて、やみぬ。さて、四五

日をかり有りて、曹司ずみよて、有りける所へ、利
仁、来て、いあやう、いざせ給へ。湯あみよ、太夫殿
と、いへむ、いと、かゝるき事かな。今宵身の、かゆ
く侍りつらよ、乗物こそ侍らぬと、いへむ、こゝ
よ、あやしの馬、俱して侍りと、いへむ、あな嬉しく
と、いひて、うす綿の衣、こらむかりよ、青鈍の指貫
の、裾やれらよ、同じ色の狩衣の、かゝす、落
ちらよ、志この袴も着ず。をなたらうらもの、さ
きた、赤みて、穴のあかり、濡れむみらるも、すくむ
なをぬぐもぬなめりと、見ゆ。狩衣のうらも、帯

よ、ひきゆぐめよれつるまゝよ、列きもつらるを
ねむ、つみぐう見苦し。をかーけれど、先きよ立
て、我も人も馬も乗りて、河原がまようちおで
ぬ。五位の供も、あやしの童ごよな。利仁が供
も、調度かけ、舎人雑色一人ぞ有りける。河原う
ち過ぎて、粟田口よわらよ、つづくへぞと問へを
たぶ、こゝぞくゝとて、山科も過ぎぬ。こゝつらに、こ
ぞくゝとて、山科も過つるもと、いんを、あゝとく
とて、関山も過ぎぬ。こゝぞくゝとて、三井寺よ、知り
つる僧の、わらへいさふれむ、こゝに、湯もつらつと、

物ぐるほ
存けろの下
よん、よまて
かまをどの、嘆
辞のある、ぶき
を、畏せなり。

思ふごよも、物ぐるほ、遠らりけりと、思ふよ、
こゝよ、湯有りげもな。つづく、湯もつとつを、ま
ことも、つらおへ、將て奉るなりと、いんを、物ぐるほ
しう存けろ、京まで、さと宣を、まかむ、下人な
ども、俱守べかりけるを、と、いんを、利仁、あざ笑ひ
て、利仁、一人侍らむ、千人とおぼせと、いふ。かくて、
物など食ひて、急ぎおでぬ。こゝまで、利仁、やな
ぐひとりて、おひける。かくて、行く程よ、みつの濱
よ、狐の、つら走りおでつるを見て、よき使ひ、おで
来つらとて、利仁、狐をおかされむ、狐身を、なげ

て、逃ぐれども、追ひせめられて、え逃げず。おちか
りて、狐の尻尾を取りて、引きあげつ。乗りこむ馬い
とかいとも、見えざりつれども、いみじき逸物
よて、有りければ、いづれもものぞきずして捕ら
へらる所よ、此五位走りせて行きつきこれぞ狐
を引きあげて、いあやうと、狐今宵のうちよ、利
仁が家の、つらぶがよまらりて、いもんやうを、俄よ密
人を、得奉りて、下ぐるなり。明日の巳の時よ、高嶋
邊よ、男子ども、迎へよ、馬よ鞍おきて、二足俱して
まらりてことい。若し、いもぬものなりと、狐たぶ

狐を、せん
いあやうの類い
よて、汝といふ
よ同し。

談みよ。狐も變化あるものなれど、今日のうちよ、行
きつきて、いんとて、放てむ、荒涼の使ひ哉といふ。よ
し、御覽せよ。まからうてを、よたあうといふよ、
や、狐、見返して、前よ走り行く。よく、まからめ
りといふよ、合せて、走りさきさきと、うせぬ。かく
て、其夜も、途よ止まりて、つとめて、とくおどく
ほどよ、まことよ、巳の時むらりよ、三十騎ぞかり
よりて来るもの有り。何よかあうんと、見ると、男
子ども、まらうて来うりと、いんと、不定の事かよと、
いあ程よ、たぐ、近うよ、近くなりて、まらうくと、い

ほどよ、これ見よ。まゝとよ、存しつゝちとつくを、利
仁、うちほつゝ念みて、何事ぞと問ふ。おとをしき郎
等、すくみ来て、希有の事の候ひつゝをうといふ。ま
づ、馬も有りやといふを、二足さぐらふといふ。食ひ物
をどしと、来つゝりければ、そのほどよあり居て、食ふ
所よ、おとをしき郎等のいふやうよ、希有の事
の候ひしなり。戌の時どかりよ、大盤所のむねを、
きりよきりて、やませ給ひし、かぞ、いつなる事よか
とて、俄よ、僧召さんなど、騷がせ給ひし程よ、まづか
ら、仰せ候やう、何う騷がせ給ひ。おのれを、狐を

り。別のことなし。此五日みつの濱よ、殿のわざ
らせ給ひつゝよ、あひ奉りつゝつゝよ、逃げつれ
ど、え逃げで、捕らへられ奉りつゝつゝよ、今日の
うちよ、我が家よ、いきつきて、客人、俱し奉りてな
んやぶら。あす、巳の時よ、馬こらよ、鞍おきて、俱し
て、男子ども、高嶋の津よ、ありあへといふ。若し、今
日のうちよ、いきつきて、いそぎ、かきまめ見せ
んずらぞと、仰せられつゝなり。男子ども、とく
出で立ちて、冬れ。遅く、参らむ、我も、勘當かうぶ
りなると、おち騷がせ給ひつれを、男子どもよ、召

し仰せ候ひつれども、倒ぎまよなうせ給ひよき。其
後、鳥ととも参りさざうひつるなりといくぞ、利
仁うち急みて、五位よ見あそすれども、五位あさま
しと思ひつり。物など食ひ果て、急ぎ立ちて、
らぐよ行き着きぬ。これ見よ。まことなりけりと、
あざみあひつり。五位も馬より降りて、家のさま
を見らよ、賑しくめでつき事、物も似ずも
と、着るる衣二つがよ、利仁が宿衣を着せられ
ども、身のうち、志すきつるべけれども、いみじう寒
げよ、思ひつるよ、ながすびつみ、火を、多うおとし

志すきつるを
たが障
といふは同じ。

つり。畳厚うかよ志きて、菓物食物志まうけて、た
のちくおぼゆるよ、道の程、寒くおそつらん
とて、練り色のきぬの、綿厚うかたう、こつ、ひき
重ねて、持て来て、うらおほひつるよ、たのしとを、
思つなり。物食ひなどして、こと静まりつるよ、舅
の有仁、女で来て、いふやう、こを、いうで、かさを渡
らせ給へるぞ。これよあそせて、御使ひのさま、物
づらほしうて、うへ、俄よやませ奉り給ふ。希有の
ことなりといくぞ、利仁、うち笑ひて、物の心見ん
と思ひて、志つりつることを、まことよまうて来

将を奉りし
とつくをい
るなりとい
ぶきを省け
なり。

て、告げて侍らよこそ、あんなれといくを、舅も笑
ひて、希有の事なりといふ。俱に奉らせ給ひつら
ん人も、このおもしろます、殿の御事うといくを、さ
に侍り。芋粥よ、まぶ飽うすと、仰せうられを、飽
かせ奉らんとして、将て、奉りしるとつくを、易き物
よも、え飽かせ給をさうけるかなとて、たをさう
れを、五位、東山よ、湯沸くくうとて、人をさか
りおで、かく、宣ふなりをどいひたをぶれて、夜
すく、更けぬれを、舅も入りぬ。寐所とおぼしき
所よ、五位入りて、寝んとするよ、綿四五寸をかり

何のあらよか
くゆき所も
詞ののぞ
かくたかくよ
て何のあらよ
く、かゆき所も
なり。

有る直垂あり。我がもとの薄綿を、むつらう、何
のあらよかくゆき所も、おでくるきぬなれを、ぬ
ぎおきて、練り色の、衣三つがうへよ、此直垂ひき
着ても、臥しる心、未ぶなうをぬよ、氣もあげつ
べ。汗水よて、臥しるよ、又、側らよ、人のをさう
けを、たぞと、伺へを、御足給へと候へを、参りつら
なりといふ、けをひ憎くか、ぬを、かきふせて、風
のすく所よ、ふせうり。かゝる程よ、物高く、いふ聲
す。何事ぞと聞けを、男子の、さけびて、いふやう、此
邊の下人、うけたまをれ。あすのうの時よ、切口三

寸むかり、長さ五尺むかりの茅、おのく一筋づつ、
持て参れと、いふなりけり。あさましう、おほのり
もも、いふものかなと聞き、寐入りぬ。曉方、聞
けを庭よ、延志く音の、するを、なにかざするより、
あうんと聞くよ、後夜たうだんより始めて、起き
立ちて、居るほどよ、蔀あけるよみれを、長延
をぞ、四五枚志きくる。何の料よか、あうんと見る
ほどよ、下司男の、木のやうなる物を、肩よりちか
けて来りて、一筋おきていぬ。其後、うちつゞき、
持て来つ、おくを見れを、まるとよ、口三寸むか

りの茅の、五六尺むかりなるを、一筋づつ持て来
て、おくとすれど、巳の時まで、おきけれを、居る
屋と、ひとくおきなつ。よぶ、さげびを、まや
う、其邊に在る、下人のかぎりよ、物いひ聞らすと
て、人呼びの岡とてあるつかのうへまで、いふなり
けり。たゞ、其聲の、及ぶかぎりのめぐりの、下人の
かぎり、持て来るよぶよ、さむかり多うり。まゝして、
立ちのきくる、従者どもの、多さを思ひやるべし。
あさましと、見くる程よ、五石なるのかまを、五六
尺、持て来て、庭よ、杵どもおちて、す急澄しう。何

の料どと見る程も、志ほきぬの、あをといふ物着
て、帯して、若やうよ、きくたげなき女どもの、白く
新く、き桶よ、水を入れて、此釜どもよ、さくくと
入る。何ぞ、湯湧かすうと見れむ、此水と見るも、み
せんなりけり。若き男子どもの、袂より、手ぬぐし
ころ、薄くかたる刀の、長やうたるもの、が十餘
人ぞかり、ゆで来て、此芋をむきつ、すき切りよ
切れむ、やう、芋粥煮るなりけりと見るよ、食ふ
べきころもせず。かへりても、うとましく成りよ
けり。さうくとかへりて、芋粥、ゆでまうで来

手ぬぐころ
の下よ、人のな
どいふべき語
を畧せり。

よとつとつふ。参らせよとて、まづ、大きなる土器
づいて、かねの提の、一斗をかり、入りぬべきよ、三
四よつれて、さとして、持て来ころよ、飽きて、一盛を
ごよえ食をす。飽きよとつとつふを、いみじく笑
ひて、集まりて居て、客人殿の御徳よ、芋粥食ひ
つと、いひあへり。かやうよする程も、向ひの長屋
の軒よ、狐の、さーの、どきて居ころを、利仁、見つけ
て、かれ御覽せよ。候ひ、狐の、げざんするをとて、
彼よ、物食をせよと、いひけれむ、食をすらよ、うち
食ひてけり。かくて、萬の事、たのも、といふを、お

きり者、窮者の事なり。さぐらちりず。

ろちなり。一月ごかりありて、のぼりけるよけお
さめの装束ども、あまこころり、又たごの、八丈綿
衣など、皮匣どもよ入れて、とらせ、始めの夜の直
垂、もこ、更なり。馬よ、鞍おきながう、とらせてこそ
おくりけれ。きり者なれども、所よつけて、年頃よ
なりて、ゆるされ、さるもの、さるもの、おのづ
から、有るなりけり。

用経、あら巻の事、

今もむろ、左京のかみなりける、古上達部あり
けり。年老いて、つみどらう、ふるあう、かりけり。下

目、属官の事
なり。

つらりなる家よ、ありきもせて、籠り居りけり。
そのつらさの属よて、紀用経といふ者有りけり。
長岡よなん住みける。つらさの目なれむ、このか
みのもとよも、来てなん音づれける。此用経、大殿
よ参りて、贄殿よ居る程よ、淡路守より、近く、朝
のあらまきを、多く奉りけり。贄殿よ、持て
参りけり。贄殿のあづり、よみみよ、こまき、用
経、こひとりて、まきよさげて、おくとて、よみみ
みよ、いよやう、これ人して、取りよ奉らんをりよ、
おとせ、終へと、いひお。心の中よ、思ひけるやう、

これ我がつらさのゆゑに奉りて、音づり奉らんと、思ひて、これをまきよさうげて左京のゆゑのゆゑに、いきて見れぬ、かんの君いぞ居よ、まらうどこ三人をかり来て、あるどせんとして、地火爐よ、火おろしをどして、我がゆとよて、物食をんとするよ、ちかぐしき魚もな。鯉鳥などやう有うげなり。それよ用経が申すやう、用経がゆとよこそ、津の國なる下人の、鯛のあらまき三つ、持てまうで来うりつるを、一まき、たぐ試み侍りつるが、えもいえず、めでたく候ひつれを、今、二まきをけが

ちやがりも、一本よみやがりとあり。されど、みやがりも居あがり、の意よて居、けいごうなるを、いふよやさうなるがず。

さでおきて候ふ。急ぎてまらうでつるよ、下人の候もて、持て参り、候をざりつるなり。只今、とりよ遣もさんち、いうたと、聲高く、志うりがほよ、袖をつくらひて、口ひき、ういのどひなどして、ちやがりのぞき、申せを、かみさるべきもの、ちやきよいとよき事か。とくとりよやれと宣ふ。まらうど共も、食ふべき物の、候をさめるよ、九月をかりの頃なれぬ、此頃、鳥の味をひいとらう。鯉をまごゆでこず。よき鯛を、きいのものなりなど、いひあつり。用経、馬ひくく童を、呼びとりて、馬をを、

御門のつきよ繋ぎて、唯今走り、大殿よ、贄殿の預り主よ、其おきつるあらしまき、只今おらせ給へとさうめきて、時をささず持てこ、外へよるなとく走れとて、やりつ。きて、俎洗ひて、持て参れと、聲高くつひて、やがて、用経、けふの色丁も、仕うまうらんとつひて、まをさしけづり、鞘なる刀ぬいて、まうけつ、あなをえし、つづら来ぬやなど、心もとながら居たり。遅しくと、つひ居る程も、やりつる童、木の枝よ、あらしまきこつ、ゆひつけて、持て来り。いと、かしく、あをれ、飛ぶが如走りて、まう

で来くる童哉と、ほめて、とりて、俎の上よ、おちおきて、こどぐし、大鯉作らんやうよ、左右の袖つくりひ、くり引きゆひ片膝たて、今片膝ふせて、つみづく、つきぐし、居なして、あらしまきの繩を、ふつくと、押し切りて、刀して、藁をおし開くよ、ほろくと、物どもこぼれて、落つるものも、ひらあしど、ふるしきれ、あらしうづ、ふるくづ、くやうの、物のわぎり有るよ、用経、あきれて、刀もまをさし、おち捨て、番もさきあへず、逃げていぬ。左京のかみも、客人も、あきれて、目も口も、あきそ居る

り。前なる侍士ども、あさましくして、目を見か
して、居並み居る顔どもいとあやうげなり。物
食ひ、酒飲みつる遊びも、みなすさまじくなりて、
一人たち、二人たち、みな立ちていぬ。左京のかみ
のいそぐ、此男子をむかく、えもいそぐ、志れもの
ぐるひとを、知りとりつれども、つうこのかみと
て、来睦びつれど、よーとを思をぬど、おあづき事
も、あゝねむさと見てあるみ、かゝるつらさをして、
さかろんをむ、いづすづき。物悪き人も、さかろ
き事よつけても、かゝるなり。いづよ、世の人、聞き

傳へて、世の笑ひぐさよ、せんとすくと、空を仰
ぎて、歎き給ふこと、かぎりなし。用経を馬に乗
りて、馳せ散らして、殿を参りて、贅殿のあづりよ
しずみよあひて、此あゝまきをを、惜しとおぼさ
む、おいらかよ、とり給ひてを、あゝで、かゝる事を、
志せ給へると、泣きぬぢかりよ、恨みのこと
事、限りなし。よ、すみか、いそぐ、こと、いづよ、宣ふ
ことぞ、あゝまきを、奉りて後、あゝうさまよ、宿よ
まかりつとて、おのが男子よ、いづやう、左京のか
みの、まのものと、かゝるあゝまきを、取りよおせし

とり給ひてを
あゝで、取り
給ふべきよ、さ
やうよ、て、あ
らで、の意なり。
志いで、給へる
の下よ、まよ、の
字のあゝ、まき
を省けり。

む、取りて、それよ取らせよと、いひ置きてまうで、
只今帰り参りて、見らよ、あうまきなけれど、いづ
ちいぬらぞと、問ふよ、志らぐの御使ひ有りつれ
む、宣ふせつらやうよ、取りて奉りつると、いひつ
れむ、さよこそを、あんなれと、聞きてなん侍る事
のやうを知らずといへむ、さうむかひなくとも、
いひ顔けつらん、主を呼びて、といひ終くといへむ、
男を呼びて、問ふんとするよ、出で、いかにけり。膳
部なる男が、いふやう、おのれが、部屋よ入り居て、
聞きつれむ、此我がぬら、この、真木よ、さうげら

真木を問木と
も書きて、鴨居
の上のなげ
やうの所をい
ふ。

れらる、あうまきこそあれ。こそ、誰が置きらるぞ
何の料ぞと、問ひつれむ、誰れより有りつらん。左
京のさうらんの、ぬら、のなりと、いひつれむ、さて
も、事よあうまき。すまきやう有りとして、取りお
ろして、鯛をむ、みな切りまありて、替りよふる志
きれ、ひらあうまきなどを、入れて、真木よおら
ると、聞き侍りつれと、語れむ、用経聞きて、叱り罵
ることかぎりなし。此聲を聞きて、人々いとは
しと、言ふで、笑ひ罵る。用経志らびて、斯く、笑
ひ罵らうらん程も、ありかどと思ひて、長岡の家よ、

籠り居たり。其後左京のかみの家も、えいつぐ
なりよけるとなり。

厚行、死人を家よりおぼす事

むうー右近将監下野厚行といふ者有りけり。競
馬よよく乗りけり。帝王より、始め奉りて、おぼえ
ここみ、優れうけり。朱雀院の御時より、村上の
帝の御時なんとを、盛りよつみどき、舎人よて、人
も許し思ひけり。年高くなりて、西京よ住みけり。
隣りなりける人、俄らよ死にけるよ、此厚行、訪ひ
よ行き、其子よあひて、別れの間ごの事ども、訪

ひけるよ、此死にころ親を、おぼさんよ、門、悪き方
よ向へり。されをとりて、さて有るべきよあらず。門
よりこそ、おぼすべき事よあれと、いふを聞き
て、厚行がいふやう、悪き方より、おぼさん事、殊よ
然るべからず。かつも、あまこの御子達の為め、殊
よいまこそ、かつも。厚行が隔ての垣を破りて、
それより、おぼさん奉らん。かつも、生き終ひたり
時、事よふれて、情のみ有りし、人なり。かつも折り
ぶよも、其恩を報じ申さずを、何を以て、報い申
さんといへむ、子供のいふやう、無為なる人の、家

よりわごさん事、有るべきよあらず。忌の方なり
とも、我が門よりこそ、わごさめといへども、僻事
な志、終ひそ。唯ぞ、厚行が門より、わごさ奉らんと
いひて、帰りぬ。我が子供も、いふやう、隣のぬいの
死にうら、いとほしけれむ、訪ひよ行き、うりつる
よ、あの子供のいふやう、忌方なれども、門を、つら
なれむ、これよりこそ、わごさめと、いひつれむ、い
とほしと思ひて、中の垣を破りて、我が門より出
ぐ——終くと、いひつるといふよ、妻子ども、聞きて
不思議の事、志、終ふ親かな。いみじき穀ごらの

身思はぬの下
よも人などい
ふべきを、暗せ
るなり。

聖なりとも、かゝる事、する人、やも有るべき、身思
はぬと、いひながら、我が家の門より、隣の死人
わごさ人、や有る。返すぐも、有るまじき事なり
と、みないひあへり。厚行、僻事な、いひあひそ、唯
ぞ、厚行がせんやうよ、任せて、見終へ。物のみ、く
す——いひやつも、命も短うく、ちうぐ——き事
なり。唯ぞ、物いまぬも、命も長く、子孫も榮ゆ。い
くく、物、忘みくす——きた、人といはず。恩を思ひ、知
り、身を忘らざるこそ、人といへ。天道も、これ
をぞ、恵み終あらん。よ——なき事、なごびあひそと

て、下人ども呼びて、中の檜垣を唯ぶこぼちよこ
ぼちて、それよりぞ、わざさせける。さて、其事、世よ
聞えて、殿をうも、あざみ褒め給ひけり。さて、其
後、九十をかりまで、たもちてぞ、死にける。それが
子供よ至るまで、みな命長くて、下野氏の、子孫を
舎人の中にも、多くあるとぞ。

鼻、長き僧の事

昔、池の尾よ、禪珍内供といふ僧、住みける。真言な
ど、よく習ひて、年々くく行ひて、貴ふとかりけれ
む、世の人々、さまざまの、祈りをせさせけれむ、身の

住みけるも、住
みけりなると
べし。

徳、ゆつりよて、堂も僧坊も、少くも荒れたる所な
し。佛供御燈なども、絶えずをりふの僧膳寺の
講演、志げく行をせけれむ、寺中の僧坊よ、ひまな
く、僧も住み賜をひけり。湯屋よも、湯をうさぬ、日
なく、あみ罵りけり。又、其あつりよも、小家ども、多
くゆで来て、里も、賜をひけり。さて、此内供も、鼻長
くりけり。五六寸をうりたりけれむ、顯より下が
りてぞ見えける。色も、赤紫よも、大柑子の膚のや
うよ、つづちて、ふくれり。痒ゆぐる事、限りな
し。提よ、湯をかきりて、折敷を、鼻さし入るむ

くりゑり通して火の突の顔よ、あつゝぬやうよ
して、其折敷の穴より鼻をさしゆぐ、提の湯よ、
さし入れてよくゆで、引きあげられぬ色も、濃
き紫の色なり。それを、さまよ臥せて、下よ物
をあて、人よ踏ますれぬ、つゞちたる穴ごと
よ、煙のやうなるものゆづ。それを、いゝく踏めぬ、
白き蟲の、穴ごとよ、さしゆづるを、毛拔よて、扱ひ
ぬ、四分ちりなる、白き蟲を、穴ごとよ、取りゆぐ
す。其跡も、あなよ、明きて見ゆ。それを、まよ、同ト
湯よ入れて、さしめうし湯うすよ、ゆづれぬ鼻ち

いさゝ、志ほみあがりて、たゞ人の鼻のやうよ成
りぬ。まよ、二三日よ成れぬ、さきの如くよ腫れて、
大きよなりぬ。斯くの如く志つゝ、腫れたる日數
も、多くありけれぬ、物食ひける時、弟子の法師
よ、平らなる板の、一尺ちりなるが、廣さ一寸を
くりなるを、鼻の下よ、さし入れて、向ひ居て、かみ
ざまへ持てあげさせて、物食ひもつるまでも、有
りけり。こと人よ、持てあげさせるをりも、あつ
く持て上げられぬ、腹を立て、物も食はず。され
ば、此法師一人を定めて、物食ふ度毎よ、持て上げ

さす。それよ、心地悪くて、此法師、出でざりける折
りよ、朝粥食をんとするよ、鼻を持ってあぐる人な
うりけれむ、いりよせんなんど、いふ程よ、使ひける
童の、我れを、よくもてあげ参らせん、更よ其御な
よそ、よもおとらうとといふを、弟子法師聞きて、此
童の、斯くも申すと聞くを、中大童子よて、みめも、
きこさなげなくありけれむ、うへよ召しよげて、有
りけるよ、此童、鼻持とあげの本を取りて、うるも
しく向ひ居て、よきほどよ、高ううず低ううず、持
とげて、粥をすらすれむ、此内供、いみじき上手

ひと物も満面
といふは同じ
すべてひとと
いふ語は満の
字の意あり。

よて有りけり。例の法師よも、優りうりとして、粥を
すらす程よ、此童、鼻をひんとて、そをさまよ向き
て、鼻をひる程よ、手ふるひて、鼻持とげの本、ゆる
ぎて、鼻もづれて、粥の中へ、あつりと、おち入れつ。
内供が顔よも、童の顔よも、粥とむりて、ひと物
かくりぬ。内供、大きよ腹まき、頭顔よ、かくりぬ
る粥を、紙よそのどひつ、おのれを、まがく、か
りける心、持ちこつる者かた。心な、のかさゝるとも、
おのれがやうなる物を、いふぞう。我れなうぬ
やどつたき人の御鼻よも、そまゝあれ。それよも、

斯くやをせんずる。うそなりける心なり。の志
れものかま、おのれく、まてくとして、追ひまてけ
れを、まつまゝ、よ、世の人の、かゝる鼻持ちくも、
在、まてをこそ、鼻持ちくげも、参りめ。をこの
事宣へる、御坊かまといひければ、弟子ども、物
の後らよ、適げのきてぞ、笑ひける。

袴垂保昌よ令ふ事

むう、袴垂れとして、いみじき、盗人の大將軍あ
りけり。十月をうりよ、きぬの用なりければ、衣す
こゝまうけんとして、さるべき所々、うかづひあり

用なりければ
て用ありけれ
むの意なり。

きけるよ、夜中をうりよ、人の、みを静まりをそ
後、月の朧らなるよ、きぬ、許多着くけり、主の指
貫のそむをさうみて、衣の狩衣めきく着て、唯ぶ
ひりり、笛吹きて、行きもやらず、練り行けむ、あそ
れ、是こそ、我れよ、衣得せんとして、おでくろ人な
めりと思ひて、走りかゝりて、衣をそがんと思ふ
よ、あやしく、物の怖ろしくおぼえければ、添ひて
二三町行けども、我れよ、人こそ、付きされと思ひ
くろ氣色もなし。いあ、笛を吹きて行けむ、試み
んと思ひて、足を高くして、走りよりくろよ、笛を

吹きさながら見かくりする氣色、どうりかゝるべくも
覺えさうりけれど、走り遁ぎぬ。箇様よ、許多度とさ
まかうさまよするよ、露をうりも騒ぎさうる氣色
なり。希有の人かと思ひて、十餘町をうり、俱
て行く。さうとそ有らんやと思ひて、刀を抜き
て、走りかくりする時よ、其度、笛を吹き止みて、立
ち帰りて、こそ、何者ぞと問ふよ、心も失せて、我れ
よもあうで、ついみられぬ。又、如何なる者ぞと問
へを、今を遁ぐとも遁がさどと、覺えけれど、ひそ
ぎよ候ふといふを、何者ぞと問へを、あざな袴垂

とちん、いふれ候ふと答ふれを、さういふ者ありと
聞くぞ、危うげよ、希有のやつかと思ひて、とも
よ、詣でことなうり、いひうけて、又、同ぐやうよ笛
吹きて行く。この人の氣色、今を遁ぐとも、よも遁
がさどと覺えけれど、鬼よ、きも取られさうるやう
よ、こゝともよ行く程よ、家よ行き着きぬ。何處ぞと
思へを、攝津前司保昌といふ人なりけり。家の内
よ呼び入れて、綿厚き衣つを給さうりて、衣の用
あらん時も、参りて申せ。心も知らざらん人よ、こ
りかゝりて、汝過ちすなとありこそ、あささま

く、むくつけく怖らうりか。いみどりうり人の有様なりと、捕へられて後、語りける。

なりむら、強力の學士よ達し事

むらう、なりむらうといふ相撲ありけり。時よ、國々の相撲ども、上集まりて、相撲節待ちける程よ、朱雀門よ集まりて、すみけるが、其邊、遊び行くよ、大學の東門を過ぎて、南ざまよ行くんとしけるを、大學の衆ども、許多東の門よゆで、すすみて、立ちりけるよ、この相撲どもの、過ぐるを、通さどとそなりせいせん、なり高くと云ひて、立ちふ

語りけるも、語りけりとも、どいよべき所なれど、誤脱あるべし。

とがりて、通さざりければ、さすぐよ、やどつなきこの所の衆ども、する事なれど、破りても、え通らぬみ、たけひきうかなる衆の、冠上の夜、こと人よりを、少しよろしき、中よすぐれて、ゆで立ちて、いしく制するが、ありけるを、なりむらうを、見つめてけり。いざしく、帰りをんとそ、むこの朱雀門よ帰りぬ。其處よといふ、この大學の衆、憎きやらどもかな。何の心よ、我れらるを、通さざるとを、するぞ、唯だ通らんと、思ひつれども、さもあれ、今日を、通らで、明日通らんと、思ふなり。たけきうびらかよて、中

よすがれてなり制せんとつひて、通さざるとまぢ
ふらがる男、憎きやつなり。明日通らんよも、必ず
今日のやうよ為んずらんをたぬし、其男が臀鼻
血あゆむらゝ必ず蹴給へといくを、さつらつと
相撲のきをかきて、それが蹴らんよを、つかも
つかものを、教議よそこそつらめといひけり。
この臀蹴よといつらつ、相撲を、おぼえあるか、こ
と人よりの優れ、走りどくなどありけるを見て、
なりむらも、いふなりけり。さて、其日を、各々、家々
よ帰りぬ。又の日よなりて、昨日参らざりし相撲

つかも、生う
ドも、生きて
居らま、の意
なり。

などの、許多召し集めて、人がちよなりて、通らん
とかまあるを、大學の衆も、さや心得よけん。昨日
より、人多くなりて、かゝがまゝなり制せん
といひ、まそりけるよ、この相撲ども、おちむれて、
あゆみかゝりし。昨日、優れて制せし、大學の衆
の、例の事なれを、優れて、大路の中よ立ちて、過ぐ
さざと思ふ氣色志し。なりむら、臀蹴よといひ
つる相撲よ、目をくらむせければ、この相撲人より
たけ高く、大きき、若く、いさみする男よて、くらり
高やうよ、撥きあげて、さゝ進み歩みよる。それよ

續きて、こと相撲も、唯ぐ通りよ通らんとするを、
かの衆どもも、通さざるとする程よ、臀蹴んとする
相撲、かくいふ衆よ、走りかゝりて、蹴倒さんと足
をいゝも、さげさるを、この衆も、目をかけて、背
をたさめてちぐひければ、蹴もづいて、足の高く
あがりて、のげさまよなるやうよ、志さる足を大
學の衆取りてけり。其相撲を、細き杖などを、人の
持ちさるやうよ、引き提げて、かゝ人の相撲も、走
りかかれた、其れを見て、かゝ人の相撲、遁げさる
を、追ひかけて、其手よ提げさる相撲を、投げさ

れを、振り抜ききて、二三段さうり投げられて、斃れ
即しよけり。身碎けて、起きよるべくもなかり
ぬ。それを、む知らずなりむらぐ、あるかゝさまへ、
走りかゝりければ、なうむらも、目をかけて、遁げ
けり。心もおろさず、追ひければ、朱雀門の方さまへ、
走り入るを、やがて、つめて走りかゝりければ、さう
へられぬと思ひて、式部省の築地越えけるを、引
きさどめんとて、手をさし遣りさうりけるよ、早く
越えければ、こと所を、え捕らへず、片足さうり下
りさうりける踵を、沓らさうりへなぐら、さうりへさうりけ

水を、沓の踵よ、足の皮を取り加へて、沓の踵を刀
よて切りとるやうよ、引き切りて取りてけり。な
りむら、築地の内よ立ちて、足を見れむ、血走りて
止まるべくもなし、沓の踵、切れて失せよけり。我
れを追ひける大學の衆、あさましく、力あるもの
よてぞ有りけるなめり。臀蹴つる相撲も、人杖よ
遣ひて、投げ碎くめり。世の中廣ければ、かゝる者
の在るこそ怖ろしき事なれ。投げられとる相撲
も、死に入りとれむ、物よ掻き入れて、荷ひて持て
行きけり。このなりむらかゝのすけよ、然々の事

堪くうんた
の下よ、取らべ
しなどの詞を
略せり。

をん、候ひつる。かの大學の衆も、いみじき相撲よ
候ふめり。なりむらと申すとも、合ふべき心地仕
らずと、語りければ、かゝのすけも、宣旨を申し下
ごして、式部の省なりとも、其道よ、堪くうんた
といふ事あれむ、況て大學の衆も、何條事うあら
んとて、いみじう尋ね求められければ、其人と
も聞とをらずて、止みよけり。

大太郎盗人の事

むらし、大太郎とて、いみじき、盗人の、大將軍あり
けり。それが京へのむらて、物取りぬべき、所あら

倒れろの下の
まをの字を略
しう。

を、入りて、物取らんと思ひて、伺ひありきける程
よ、めくりもあざれ、門なども、かきくを倒れろの
横様よ、よせかけろ所のあざけなるよ、男とい
ふものも、一人も見えすして、女の限りよて、とり
物多く、とり散らしてあらよ、令せて、八丈賣る者
など、許多呼び入れて、衣多く取りおど、えり替
へさせつ、物どもを買くを、物多りける、所か
なと思ひて、立ちとまりて、見のろれを、をりしも、
風の、南のすづれを、吹きあげろよ、すづれの中
よ、何の、入りろりと見えねども、皮子の、いと高

女共の限り
ても、女共の限
りよて、といふ
よおを、ま
見れをも、大太
郎が、あざな
り。此頃の文よ
ま、かうやうな
るもあり。

く、おち積まれろ前よ、ふとあきて、衣なありと、
見ゆる物、とり散らしてあり。それを見て、嬉しき
ろざかま、天ろの、我れよ、物をたぶなりけりと、
思ひて、走り歸りて、八丈、一足、人よ、借り、よて来て、
賣るとして、近くよりて見れを、内よも、外よも、男と
いふものも、一人もなし。唯、女共の限りよて、見
れを、皮子も多り。物を見えねど、うづだろ、蓋
お厚られぬ。衣なども、珠の外よあり。布、おち散ら
し、なごして、いみどく、物多く有りげなる、所か
と見ゆ。たろ、いひて、八丈を、賣らうて、持ちて歸

りて、ぬゝ取らせて、同類どもよ、かゝる所こそ
あれと、いひまゝにして、その夜来て、門よ入らんと
するよ、たゞり湯をおもてよ、かゝるやうよおぼ
えて、ふつとえ入らざる。こも、いふなる事ぞとて、集
まりて、入らんとすれど、せめて、物の怖しかりけ
れむ、あるやうあらん、今宵をいふとて、帰りよ
けり。つとめて、さても、いふなりつる事ぞとて、同
類などぐりて、賣り物など持せせて、来て見らよ、
いふよも、煩き事なり。物多々あるを、女共の
限りして取り知で、取り納めすれむ、ことよもあ

おぼゆるをめ
りの上、怖し
くといふべき
を略しう。

入らざるの下
まかりといふ

らざと、返すぐ、思ひ見あせて、又、くられをよしく
志しめて、入らんとするよ、猶、怖しおぼえて、
え入らざる。ぬゝ、先づ、入れくと、いひうらて、今宵
も、なほ入らざる成りぬ。まゝ、つとめても、同ドやう
よ、見ゆるよ、なほ、氣色けなる物も見えず。唯、我
が、臆病よ、おぼゆるなめりとして、まゝ、其夜、よ
志しめて、行き向きて、まゝ、目頃より、猶、
物怖しかりけれむ、こも、いふなる事ぞといひて、
帰りて、いふやうも、こも、起し、いふ人こそを、
先づ、いふ。先づ、大左郎が、入らざるべきといひけれ

づきを暗せり。
いそれうりた
理りよかまへ
りの意。

だ、さもいそれうりた、身を無きよして、入りぬ。
それよ取りつきて、かこも入りぬ。入りぬれど
も、猶物の怖しけれむ、やもら、あゆみよりて見れ
ど、あぢらなる、屋の中よ、火ともいこら。母屋の際
よ、かけこる簾をむ、おらして、すぐれの外よ、火を
むともいこら。まことよ、皮子多うり。かの、すぐれ
の中の、怖しおぼゆるよ、今せて、すぐれの中よ、
矢を爪ゆる音のするが、その矢の来て、身よ、まの
心地して、いふむうりなく、怖しおぼえて、帰り
ぬづらも、背をそらうりこるやうよ、おぼえて、かま

きやうようた
郷應の字音な
り。

へて、ぬでえて、汗を拭いて、こそ、如何なることぞ、
あさましく、怖しかりつる、爪よりの音かなと、い
ひ今せて、帰りぬ。そのつとめて、其家のかこもら
よ、大太郎が、知りこりけるもの、ありける家よ、行
きこれを見つけて、いみじくもやうようして、い
つ、のほり給へるぞ、おぼつらなく侍りつる、など
いへむ、唯今、まうで来つるまよ、まうで来さ
るなりといへむ、土器参らせんとて、酒をかいて、
黒き土器の、大きなるを、さうづきよして、土器と
りて、大を部よさして、家あるど、飲みて、土器渡

つ。大右郎とりて、酒をひとかきしけ受けて、持ち
をぐら、この北よを誰か居給へるぞといふを驚
きしる氣色よて、まご知らぬら、おほ矢のすけた
けのぶの、此頃、のぼりて、居られしるなりといふ
よ、さそ、くりくりまゝかを、皆教を盡して、射ら
されなまゝしと、思ひけるよ、物もおぼえすたぐ
て、その受けしる酒を、家あるとよ、頭より、打ちか
けて、まぢ走りける、ものも、うづぶし、またかれよ
けり。家あるとよ、あさましと思ひて、さそ、いうみ
といひけれど、顧みぶよも、せがしとて、逃げていた

ものえを一本
よものうとあ
れども、狩と
のそず、衍文な
るべし。

あらそ、氣質下
地なごりふ意。

けり。大右郎がとりて、武者の志ろの、怖しきよ
しを、かこりけるなり。
繪佛師良秀家の焼くるを見て、悦ぶ事
これも、今もむうし、繪佛師、良秀といふものあり
けり。家の隣より、火出で来て、風押しおほひて、せ
めけれを、逃げ出で、大踏へ出でよけり。人のか
する、佛も在りけり。まゝ、衣、絹妻子なども、さそが
ら、肉よありけり。それも、知らず、唯ぞ、逃げ出で
るを、ことよしとて、向ひのつらよ、まぢり見れを、既
よ、我が家よ移りて、烟り突、らゆりけるまで、大方

ことよしとて
せめての事よ
しとの意。

向ひのつらよまらして、ちがめけれど、あさましき
事とて、人ども、来訪らひけれど、騷がず。いうに、
人ひひけれど、向ひよまらして、家の、焼くるを見て、
おちうちをづきて、時々、笑ひけり。あをれ、志つるせ
うとく、かな、年頃も、悪く、かきこる物、かきといふ
ときよ、訪らひよ、来らるものども、こを、いつに、か
くて、まらし給へるぞ、あさましき事、かき、物の、つ
き給へるうといひけれど、なんぞよ、物の、つと、き
ぞ、年比、不動尊の、火炎を、悪く、かきけるなり。今
見れど、かうこそ、もえけれど、心得つるなり。これ

せうとくを所
得の字音よて
我が身よ得の
つくをいふ

つとくをいふ
いふをいふ
なり

こそ、せうとくよ。この道をたて、世よあらんよ
を、佛ぶよよく、かき奉らむ、百千の家も、おで、来な
ん、まらし給へるぞ、あさましき事、かき、物の、つ
惜み給へるといひて、あざ笑ひてこそ、まらしけれ。
其後よ、や、良秀が、よらり、不動とて、今よ、人々、愛で
あり。

虎の、鱧を取りこる事

られも、今をむらし、筑紫の人、高ひよ、新羅よ渡
りけるが、商ひをて、帰り途よ、山の根よ、添ひて、
船よ、水汲み入れんとて、水の流れおで、こる所よ、

船をどめて、水を汲むその程、船は乗りこむもの、船をさし居て、うつ伏して、海を見れば、山の影移りこむ。高き岸の、三四十丈をうり、あまりこむ上も、虎、つゝまり居て物をうかぶ。その影、水は移りこむ。其時、人々は告げて、水汲むものを急ぎ、叫び乗せて、手毎は、櫓を押し、急ぎ、船を出さす。其時、虎をどり下りて、船は乗るも、船をさくわづ。虎も、落ち来る程の、ありければ、いま、一丈をかりを、えをどりつかで、海は、落ち入りぬ。船を漕ぎ、急ぎて行く儘も、この虎も、目をかけて見る。

来らぬの下よ、の字あり、さし、すむ、唯、来といふべきなり。

志をさし、こむりありて、虎、海より出で来ぬ。泳ぎて、陸をさし、登りて、汀も、ひろなる石の上も、登るを見れば、左のまへあり、膝より、噛み食ひきられ、血あゆ。鯨も、食ひきられ、こむりけりと、見る程も、其切れこむ所を、水は、ひこして、ひろかりをるを、いうに、するよかと、見る程も、沖の方より、鯨、虎の方をさして来ると、見る程も、虎、右のまへあり、を持て、鯨の頭も、尻をおちさす、陸をさし、なげあぐれば、一丈をうり、濱も、投げあげられぬ。のけさ、まよなりて、ふさめ、腮の志を、をどりか

りて、食ひて、こゝろび、こゝろびをうり、おち振うて、な
よくと成りて、肩よおちおけて、手をたせうるや
うなる、岩の、五六丈あるを、三の足をもちて、くづ
り坂を、走るが如く、登りて行けむ、船の中なるも
のども、これが、志をいざを見らふ、なうらた、死に入
りぬ。船よ、飛びかゝりうらまゝかぞ、いみじき、劔
刀を抜き、あふとも、かぞうり、力強く、そやから
んよを、何れを、すゞきと思ふよ、肝心うせて、船
漕ぐそらも、なうてなん、筑紫よを、帰りけるとうや
和文教科書七之卷終

すゞきと思ふ
よすゞきの下
よを、志、文字の
ある、すゞきを略
せり。

